様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月８日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2005～2008
課題番号：17520153
研究課題名（和文）カリブ海からインド洋にわたって散在する仏クレオール語の全体像
研究課題名（英文）A general view of the French Creole Languages widely existing from the Caribbean Sea to the Indian Ocean

研究代表者
恒川　邦夫(TSUNEKAWA KUNIO)
一橋大学・名誉教授
研究者番号：60114956

研究成果の概要：本研究ではフィールドワークを基本とし、現地の社会言語学的状況を、人々から直接的に情報収集することで、理論ではなく肌で感じ取ること、および、日本では入手至難な文献・映像・音声資料を収集することに努めた。モーリシャス共和国と仏海外県レユニオン島（2005 年）、セーシェル共和国（2006 年）、マダガスカル共和国とマルチニック島（2007 年、最後の年にフランスのリモージュで開催された仏語圏研究国際評議会（Ｃ．Ｉ．Ｅ．Ｆ.）の世界大会に参加し、世界中かの研究者たちと意見交換した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2005 年度	900,000	0	900,000
2006 年度	800,000	0	800,000
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
総　計	3,200,000	450,000	3,650,000

研究分野：文学
科研費の分科・細目：仏語・仏文学
キーワード：クレオール語、フレンチ・クレオール、レユニオン、モーリシャス、セーシェル、マダガスカル、言語政策、多言語社会

１．研究開始当初の背景

本研究は2002年～2004年に行った科研費プロジェクト「混成語（ピジン・クオール）を通してみるカリブ海文学の全体像」をふまえて、さらに地域を拡大して、インド洋の仏クレオールを言語学的・文学的な観点から調査しようとしたものである。初めカリブ海のマルチニック島から「クレオール」というメッセージが発せられたとき、奴隷制社会、砂糖キビ・プランテーション、植民地支配などにおいて、歴史的な共通項を持ちながら、実際には何千キロも離れていて、交流がなかったはずの、カリブ海の島々とインド洋の島々がフランス語をベースとしたクレオール語でつながっているという認識が打ち出された。それがもし事実だとすれば、言語学的にも興味深い事実である。是非、現地の島々を訪れて、言語実態を調査し、あわせて、「クレオール」というコンセプトに対するそれぞれの島の評価を見ておきたいと考えた。そうした実態調査を経ずには、単なるデマゴギーやイデオロギーの問題に還元されてしまう危険がある。《スローガン》に振り回されるだけの机上の空論にくみしていては、きちんとした評論活動もなされ得ないという研究者としての自戒もあった。

２．研究の目的

１週間から 10 日の日程で､インド洋の仏クレオール語が社会で通用している島々を訪問し、研究者（大学人）・作家・芸術家と会い、話を聞き、社会生活の実態の把握に努めること。さらに日本では入手困難な文献・映像・音声資料をできるだけ収集すること。

３．研究の方法

基本はフィールドワーク。現地に行く前に、研究者（主として大学人）、作家・音楽家・画家等に文書・メイルで連絡を取り、できるかぎり多くの人に面会し、質問し、意見交換をする。また持参のカメラ・録音機でインタヴューや街の風景を記録、音楽については録音されたＣＤを購入する一方、可能な限り録音・録画につとめる。帰国後、情報整理し、学会発表・雑誌論文などの形で成果を報告する。

４．研究成果

（１）インド洋の島々の仏クレオール語のテクストや辞書が入手できたことにより、仏クレオール語諸語の比較検討ができるようになった。その結果、マクロ的には、多くの共通点が見出されるが、詳細に見ると、英語を始めとする他言語の影響が微妙に違い、クレオール話者といえども、聞いたら直ちに隈なく分かるというほどの近接性はないことが確認された。

（２）社会言語学的には、島の政治・経済的ステイタスが大きな影を落としていることが分かる。独立の共和国を形成している島では、みんなが話しているクレオール語について「国語」論議が起こる余地がある一方、植民地から海外県に転じた島（レユニオン島）においては、むしろ文化的側面が強調される。本土の国語と競合するのではなく、文化的補完言語としての価値が強調されるのである。

（３）いずれの場合も、今日的なグローバルなコンテクストで、大言語の英語・仏語が果たす役割を無視しては、そもそも国の政治・経済が成り立たなくなる恐れがある。言葉はアイデンティティに関わるので微妙ではあるが、カリブ海の知識人たちが主張するように、アンデンティティというコンセプトそのものが、＜単元的＞なものから＜多元的＞なものへ、変わっていくほかないだろう。すなわち、国家の枠組みにおいては、行政サービスや公教育の場で、公用語として、英語や仏語が使われ、外交・貿易などもそうした国際性をもった大言語使用が基本となるが、より私的な空間を彩る分野、すなわち文化空間では、クレオール語をはじめ、少数言語が活用されることになる。そうした状況は、西欧の小国における言語状況にも通じるもので、小国の国民ほど多言語環境に身を置き、英・仏などの大言語を巧みに操りつつ、文化空間においては、各国語が生気を帯びて運用されている。たまたま同じ海域にあって、一方は海外県、もう一方は独立国であるレユニオン島とモーリシャス島がそうした問題の二面性をよく表しているように思われる。

（４）収集された資料の中で、とくに貴重なものと思われるのは、セーシェル共和国において提供された資料および現地で購入した書籍と思われるので、以下に記しておく。

セーシェルの文化局が用意してくれた文献は以下の通り：

（１） Association BANZIL Kreol 2005 の規約

（２） Penda Choppy, *The Seychelles "moutya" as a theatre prototype and historical record*, November, 2006

（３） Penda Choppy, *The development and evolution of Seychellois kreol,* 1999.

（４） Penda Choppy, *Action Plan 2003-2007*, Kreol Institute, Ministry of local government, Sports and culture, April, 2002.

（５） Marvelle Estrale, *Introduction to a collection of "Moutya"*, text entitled: *Nou bann teks Ansyen Moutya*, November 2006.

（６） Athalie C.Ducrotoy, *Akcademic Writing Seychelles*, UK. 2004.

（７） La politique des langues dans le curriculum national (Seychelles), Ministère de l'Education, République des Seychelles.

その他現地で購入した書籍：

1.Deryck Scarr, *Seychelles since 1770, History of a Slave and Post-Slavery Society*,

Hurst & Company, London, 1998.

2.Athalie Ducrotoy, *Beautiful Isles, Beautiful People, a family in old Seychelles 1780-1995,* Rawling Publications, Kent England, 1995.

3. Danielle de St Jorre, Guy Lionnet, *Diksyonner kreol-franse / dictionnaire créole Seychellois-français,* Bamberg et Mahé, Imprimerie PRINTECORESS HOLDINGS (PTY) LTD., 1999.

4. John Bowler, *Wild life of Seychelles*, **WILD**guides Ltd., Hampshire, UK., 2006.

（５）本研究で最後に訪れたマダガスカルは巨大な島（ほとんど亜大陸）で、旧仏領の植民地であったが、1960 年にフランスから独立した。その後、マルガシザシオン（マダガスカル化）政策が取られてきたが、近年いくらかフランス語への復帰が見られる。とくにエリート知識人にその傾向が顕著だが、この島の影響は、レユニオン島を訪れた際に改めて感じた。レユニオン島もモーリシャス島もアフリカ大陸に近いので、アフリカの影響は無視できないが、同時に、より近いところにあるマダガスカルの影響も色濃く落ちているように思われる。レユニオンの山岳地帯にはマダガスカル語に由来する地名がいくつもあるし、首都サン＝ドゥニの市場にはマダガスカル商人が沢山来ている。そもそもカリブ海のクレオール列島の研究から始まったインド洋のクレオール諸島の研究であるが、地政学的には、マダガスカルのような大きな島、いわゆる英仏の植民地帝国とは別の文化を育んできた国との関係も詳細に研究する必要があるように思われた。マダガスカルで聴取した限りの話では、インド洋の仏語表現の作家の組織があるようであるが、あまり機能していないらしい。しかしマダガスカルの仏語表現作家たちは、インド洋のクレオール語の島の作家たちと微妙につながっているようで、インドネシアにつながるポリネシア系の民族・言語ルーツを持つ彼らの影響は、カリブ海には存在しない、新たな要素、アジア的な要素を＜クレオール＞に接続しているようで、今後の研究に興味深いテーマを提供するものと思われる。

（６）マダガスカルで会った（仏語表現の）作家たちの名前を記しておこう。

エステル・ランドリアマノンジ
（Esther Randriamanonjy）
シャルロット・ラフェヌマンジャト
（Charlotte Rafenomanjato）
ラマカヴェルー将軍
（Jeneraly Ramakavelo）
それにメリナ語（マダガスカル語）表現の大御所（国民的詩人といわれる）
フィテニ・ラド
（Fiteny Rado）
さらにアンタナリヴ大学仏文科の教授
ジャニーヌ・ランベルソン
（Jeannine Rambeloson）
である。

（７）フランス文学の世界では若き日にマダガスカルに滞在して、民衆詩のハイン＝テニを収集し翻訳したジャン・ポーランが有名だが、独立後半世紀ほど経たマダガスカルの仏語のプレゼンスとの関係で、本格的な研究がなされてもおかしくないだろう。またフランコフォニーという観点から、現代マダガスカル文学をどのように位置づけるかという問題も、＜クレオール＞との関係を深化させる側面的な主題になり得るかもしれない。

（８）言語学的に、また、日本の異文化研究の特異な側面に、日本支配時代の台北大学の南方人文研究所の存在がある。たまたまマダガスカルを訪れるにあたって、東京にあるマダガスカル大使館に何度か足を運んだ際に、代理大使のフェノ氏がくれた本にフランス人の神父が記した「マダガスカル文法」の邦訳があった。仁平芳郎氏が訳したもので、序文によると、氏が旧台北帝国大学南方人文研究所に在勤中に、戦雲急を告げる中で、手がけたものであるという。出版は限定５０部で１９８８年ということだが、日本の異文化研究が思わぬところに根を持っていたことがわかる興味深いめぐりあわせである。

（９）＜クレオール＞というコンセプトは植民地主義の遺産であると同時に、あらゆる言語・文化現象につきものの「混淆」プロセスを念頭においたものである。そのために、言語実態を実際に即して詳しく知ることと同時に、歴史的・社会的コンテクストをきちんと見据えないと、問題の根底が見えてこない。それぞれの社会が否応なしに混成化し、日本のような極東の島国にもその波は押し寄せてくるだろう。植民地主義を批判してポストコロニアルというコンセプトが押し出されてきたが、そこには負のイメージがこびりつきすぎて、新しい、ポジティヴな切り口が見えないような気がする。＜クレオール＞が受け入れられるのは、そこに、現状肯定的な響きと未来志向型の発想の卓抜な取り合わせがあるからだろう。本研究のフィールドワークの結論も同様である。けして同じではない国々/島々に通底する何か、それが、つまるところ＜クレオール＞なのである。さらに言えば、世界がつながってくると、あらゆる地域は相対的に、＜島化＞されるのであり、そこに当初とは違った意味での、より広義に

解釈される＜クレオール列島＞の意味があるのではないだろうか。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

１．恒川邦夫、「《クレオール》列島」、『ふらんす』（白水社）、査読：無、84 巻 3 号、2009 年、p.36-38
２．恒川邦夫、「追悼エメ・セゼール、《苦痛》と《豪奢》に彩られた生涯」、雑誌『現代詩手帖』（思潮社）、査読：無、第 51 巻 6 号、2008 年、p.102-103
３．恒川邦夫、「地球の《ざわめき》から― 人と言葉の大渦潮」、『言語社会１』一橋大学言語社会研究科、査読：有、１巻 1 号、2007 年、p. 6-11、査読：有、これはこの言語社会研究科紀要の創刊号特集の序文であるが、このあとに恒川邦夫・松永正義・糟谷啓介による鼎談「《支配》《被支配》《言語》をめぐる三声の争鳴」p. 12-58 が続く。
４．恒川邦夫、「《クレオールな》詩人たち」、『現代詩手帖』（思潮社）、査読：無、第 50 巻 8 号、2007 年、p. 146-152 、＊なお、これは 2006 年 1 月から一年半（18 回）におよぶ連載の最終回である。他の掲載分は省略する。同連載は現在大幅に加筆・補筆され、単行本化が進められている。
５．恒川邦夫、「管見『フランス語系クレオール（諸）語』」、『言語文化』一橋大学語学研究室、査読：有、第 43 巻、2006 年、p. 83-103.

〔学会発表〕（計３件）

１．恒川邦夫、La notion du temps et de l'espace dans le Haïku de Bashô, une exégèse de Okuno Hosomichi リモージュ大学における第 22 回ＣＩＥＦ（＝Conseil International d'Etudes Francophones 仏語圏研究国際評議会）世界大会における発表、2008 年 7 月 2 日。
２．恒川邦夫、*Laïcité et Spiritualité*, パリのユネスコにおけるサンゴール・シンポジウム「アフリカの伝統的宗教とイスラムおよびキリスト教との出会い」*Rencontre des traditions religieuses de l'Afrique avec l'Islam et le Christianisme* における発表、2008 年 2 月 15 日。
３．恒川邦夫、*Understanding Europe's persona：the detour via the Far East* 英国スコットランドのセント・アンドルース大学におけるシンポジウム「ヨーロッパとその他者たち」Europe and its others における発表、2007 年 7 月 7 日。

〔図書〕（計４件）

１．恒川邦夫、「ハーン、ゴーガン、セガレン」、平川祐弘監修『講座小泉八雲』（新曜社）、2009、（印刷中）。
２．Kunio TSUNEKAWA, *Understanding Europe's persona：the detour via the Far East*, in Europe ant its Others, edited by Paul Gifford, Peter Lang, 2009,(in press).
３．Kunio TSUNEKAWA, Relire *Ainsi parla l'Oncle* au tournant du nouveau siècle, in Jean Price-Mars, *Ainsi parla l'Oncle suivi de revisiter l'Oncle*, Editions Mémoire d'encrier, Montréal, 2009, p.415-419.
４．Kunio TSUNEKAWA, *Portraits d'un charmeur haïtien hors gabarit*, in *Typo/Topo/Poétique： sur Frankétienne*, édité par Jean Jonassaint, L'Harmattan, 2008, p.149-160.

〔その他〕
なし。

６．研究組織
(1)研究代表者
恒川　邦夫(TSUNEKAWA KUNIO)
一橋大学・名誉教授
研究者番号:60114956
(2)研究分担者
なし。
(3)連携研究者
なし。

直接的な連携研究者ではないが、電子的に有用な情報を随時配信してくれる二つの貴重なコンタクトがあるので、以下に記しておく。
１（マルチニック島）モンショアシ Monchoachi(詩人)
２（レユニオン島）アレクス・ゴーヴァン Alex Gauvin （小説家・大学教師）